神沢　怜菜（かんざわ　れな）　七国小　４年生

作品名：仲間を大切に
図　書：とべないホタル

「わぁーまるで雪がふってきたみたい。」
だんだんと星がかがやくみたいに光り始めたのは、ホタルのむれです。夜空にパラパラと白い雪のようにたくさん飛んでいます。
去年、今年と家族で公園へホタルを見に行った時のことです。草の上にとまっているホタル、川の上を飛んでいるホタルはいましたが『とべないホタル』はいませんでした。
この本のしゅ人公である『とべないホタル』がもしわたしだったら、みんなが飛んでいるのに自分だけ飛べないのはやっぱり悲しすぎます。なにかが人よりできないだけで「この人は、人間ではない」と思われるようで、仲間外れにされたみたいで泣いてしまうと思います。しかし『とべないホタル』はくじけず木のえだに登ったり、みにくい羽をせいいっぱい動かす努力をしていました。
そして他のホタルたちも『とべないホタル』のことを、かくれてただみていただけでなく、どうすれば飛べるようになるか一生けん命考えていたのです。
わたしのクラスでは、今、全員で飛ぶ大なわにはまっています。タイムを計ったり、記録をのばすため、クラスいちがんとなって努力していますが飛べない子も少しいます。
そこでどうやったら飛べるようになるか話し合いました。「まわしている人のすぐ横からなわのまん中に行って。」「とんでから出る時は、走りぬけて。」と、飛べない子をせめたりするのではなく、アドバイスをみんなで、考えました。そのけっか、一回もひっかからずに飛べて喜び合いました。
この本を読んで「仲間ってどんな時でもみていて、あぶない時には、助けてくれるんだな。」「できないことをなやんでいる子には、そばにいれなくても、思いやり、アドバイスしてあげることが大切だな。」と思いました。
『とべないホタル』のみがわりになって、ホタル取りにきた男の子の手に、まるで「つかまえてください」というかのように、自然にとまったホタル。
なんとわたしにも、このようなホタルがきたのです。今年公園で、一ぴきのホタルがとつぜん顔にとまりました。
このホタルはどんな思いでとまったのでしょうか。もしかして『とべないホタル』のみがわりになるためだったのかもしれません。

　ホタルたちのこのようなやさしさを、クラスの全員の心に残したいなと思いました。